

---

今日のみ言葉 187 2010.1.13

「真理を悟らせる」

(ヨハネ 16 の 13)

真理の霊が来ると、あなた方を導いて真理をことごとく悟らせる。

When the Spirit of truth comes, he will guide you into all the truth.

---

私たちが真理を悟るためには、どのようなことが必要と思われるだろうか。小、中、高校や大学教育における勉強や各人の努力によって、あるいは、人生経験によって、またさまざまな読書や厳しい修業によって等々、さまざまなことが、思いだされるであろう。

しかし、ここでは、普通考えられているようなこととは、まったく異なる道が示されている。それが、真理の霊によってということである。

大学関係で専門的に研究してその分野に関する真理を深く知る人はたくさんいる。しかし、この聖書の言葉で言われている真理は、そのような科学的な真理、学問的な真理とも異なっている。

ここでいう真理とは、生きる力を与えるものであり、外的な状況にもかかわらず、希望や喜びを与え、何ものによっても変えがたい平安を与えるものあり、死の力にも打ち勝たせるものである。このような真理は、現在の学校や大学などが存在しなかったときから、またそうした教育をまったく受けていない人たちも与えられていたものであり、そのような学問とは関わりなく与えられるものであることは、はっきりしている。

実際、イエスが語られた当時、福音を伝えられた多数の人たちは、学問などしていないし、書物を持つということすらできない人たちであった。イエスの代表的な弟子であったペテロ、ヨハネ、ヤコブたちは、みな学問や研究などとは全く関係のなかった漁師たちであった。彼らはこの言葉にあるように、真理の霊(聖霊)を受けることによって、真理が何かを知り得たのであった。

使徒パウロは学問をしていた人であった。しかし、その学問にもかかわらず、彼は基督教の真理を見抜くことができず、かえって基督教を全力をあげて迫害していたのである。このことは、パウロが受けていた学問が、聖書でいうような真理を与えなかったことを示している。そのパウロは次のように書いている。

「兄弟たち、あなた方が召されたときのことを、思い起こしてみなさい。人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはない。

…神は、この世の愚かな者を選び、この世の弱い者を選び、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである。」(Iコリント1の 26

～28 より)

そのような弱い立場にあった彼らが、全体としてみるなら、厳しい迫害にも耐えて信仰を守り抜き、キリスト教は最終的にローマ帝国の迫害の力に勝利したのである。

彼らが驚くべき力を発揮して、福音の真理を後代に伝えていくことができたのは、まさに真理の霊が与えられたからであった。

この真理の霊によって、生きる希望を失った人にも、そうした絶望に打ち勝つ力はどこにあるのかをも悟るし、その力をいかにして得るのか、ということも知り、実際にそうした力を与えられることで、闇の力に勝利していくことが可能となる。

そしてこの真理の霊が与えられるためには、学問や能力など関わりなく、いま置かれているところで、神に求めるだけでよい。それを主イエスは、次のように言われたのである。

「求めよ、そうすれば与えられる。探せ、そうすれば、見いだす。」(マタイ7の7)

---

### 野草と樹木たち



アケボノソウ(リンドウ科)

伊吹山(標高 1377m、滋賀県と岐阜県の県境にある)2009.9.21

この日は、静岡での聖書講話を終えての帰途でした。高速道路の料金が安くなったこと、9月の5連休ということで、私がかつて経験したことのない大渋滞となり、あまりにも進まないのので以後の予定を変えて、途中で高速道路からおりて、近くの伊吹山の植物を

調べることにしたわけです。

ずっと以前から、高速道路や列車で通るたびに、その特徴ある山容を目にしていたこと、また徳島の剣山でも、イブキトラノオという花には以前からなじみがあり、その花の名前になっていることもあって、いつか登りたいと思っていたのですが、時間的な余裕がまったくないので、そのようなことはあきらめていただけに、予想外の賜物でした。

ここにあげた、アケボノソウは、伊吹山でもわずかしは見られないということでしたが、この写真のものは、本来の山頂付近の道からは相当離れた山道、ほとんどの人が訪れないところで、見出したものです。

花びらの半分ほどから先端の部分にある黒い小さな斑点が、夜明け(あけぼの)の星のようだというので、この名前があります。純白の花びらにこの小さな星のような点、そしてその手前にある緑色の二つの斑点とあいまって類のない色合いと変化にとんだ模様となっているので、一度、野生の状態で見ただけの人には忘れがたい印象を残すのです。

私も、40年ほど昔、徳島県の中津峰山(標高 773m)の頂上近くの沢で初めて見付けて印象に残っていた花で、その後も折々に各地の山で見かけたものですが、最近は少なくなっているようです。

この花が、リンドウ科に含まれ、薬草として有名なセンブリ属で、センブリの花を見たことのある人は、すぐにその類似性に気付くと思います。

暗い夜空に点々と光る星たちに対して、この花は、白い花びらに点々と小さな黒い点と緑の大きい点が星のように散りばめられた美しいものです。

この地上に見られるこのような野草の存在も、しばしば星のような輝やきとして私たちの心に残ります。そして、こうした植物の花を実際にみることができない体の弱い人たち、あるいは目の見えない方々の心の内にも、星のように光るものを与えて下さるのが、聖書に記されている愛の神だと言えます。

(文、写真とも T.YOSHIMURA)